

五島列島・下崎山町方言の動詞語幹における u/i 交替

有 元 光 彦

0. はじめに

有元 (1991, 1992a, 1992b) では、下崎山町方言の動詞が活用する際に、動詞語幹内で起こる母音交替について見てきた。有元 (1992c) では、この母音交替現象の概観を述べた。個々の現象として具体的な例を挙げていないのは、残すところ u/i 交替だけであるので、本稿ではその詳細な例及び分析を示すと共に、それが他の母音交替とどのような関連性があるかについて考察する。

まず、本稿で「u → i 交替」と呼ぶものは次のような例が示しているものである。¹⁾

- | | | | |
|-------------------|----------|-----------|----------|
| (1) /kudus-/ <崩す> | kudzuci | kudzusan | kudzuta |
| | kudzici | kudzisan | kudzita |
| | *kudzeci | *kudzesan | *kudzeta |

ここでは、語幹末子音/s/の直前の位置にある母音/u/が、[u]で現れている形も[i]で現れている形も適格である(但し、[e]で現れている形は不適格)。[u]で現れている形は、基底の母音のまま音声形として現れているのであるから、問題はない。問題なのは、[i]で現れている形で、基底の母音/u/が何らかの規則を被って[i]として現れていると考えられる。この「何らかの規則」を、ここでは便宜上「u → i 交替」と呼ぶことにする。もっとも、u → i 交替であると考えられるのは、基底の母音を/u/であると仮定しているからであって、(1)の分布を見て、そう決定できるかどうか、もっと言えば基底の母音は/i/であって、「i → u 交替」が起こっているのだと言えないこともない。crucialな問題は、ここにあるのである。そこで、次のような例がある。

- | | | | |
|-----------------|-----|-------|---------------------|
| (2) /sik-/ <敷く> | fi? | fikan | fita |
| | su? | sukan | *suta ²⁾ |

この例は、以上の考え方の流れで行けば、「i → u 交替」ということになる。しかし、(1)も(2)も分布上殆ど変わらない。(1)をi → u 交替としても、(2)をu → i 交替としても何等差し障りはないのである。本稿では、有元 (1992c) で示した母音交替全体の並行性を考慮して、(2)のような例を「u → i 交替」として捉え直して行くことにする。詳細は以下に回すが、もう一つ興味深い現象が、次の例に現れている。

- | | | | |
|-------------------|---------|----------|---------|
| (3) /yurus-/ <許す> | juruçi | jurusan | juruta |
| | *juriçi | *jurisan | *jurita |

*jureçi *juresan jureta

この例では、u → i 交替は起こっていないのに、完了形で語幹末子音の直前の母音が [e] として現れる形が適格となっている。

以上(1), (2), (3)と三種類のパターンを出したが、本稿ではこれらのパターンがどういう環境に現れるか、より詳細なデータを挙げつつ、分析を試みる。そして、暫定的ではあるが、その環境または条件の一般化を追求して行く。

1. u → i 交替

まず、V₁の/u/が[i]として現れる場合のデータを挙げてみる。³⁾

(4) a. /kudus-/<崩す>	kudzuçi	kudzusan	kudzuta
	kudziçi	kudzisan	kudzita
/hadus-/<外す>	hadzuçi	hadzusan	hadzuta
	hadziçi	hadzisan	hadzita
/utus-/<写す>	utsuçi	utsusan	utsuta
	utfiçi	utfisan	utfita
/kikkudus-/<切り崩す>	kikkudzuçi	kikkudzusan	kikkudzuta
	kikkudzıçi	kikkudzisan	kikkudzita
/hunhadus-/<踏み外す>	hunhadzuçi	hunhadzusan	hunhadzuta
	hunhadziçi	hunhadzisan	hunhadzita
b. /unaduk-/<頷く>	unadzu?	unadzukan	unadzuta
	unadzi?	unadzikan	unadzita
/tuk-/<着く>	tsu?	tsukan	*tsuta
	tfi?	tfikan	tfita
/otetuk-/<落ち着く>	otetsu?	otetukan	?otetsuta
	otetfi?	otetfikan	otetfita
/tuduk-/<続く>	tsudzu?	tsudzukan	tsudzuta
	tsudzi?	tsudzikan	tsudzita
/kantuk-/<噛みつく>	kantsu?	kantsukan	kantsuta
	kantfi?	kantfikan	kantfita
/tutuk-/<つつく>	tsutsu?	tsutsukan	tsutsuta
	tsutfi?	tsutfikan	tsutfita
/uduk-/<疼く>	udzu?	udzukan	udzuta
	udzi?	udzikan	udzita
/tuk-/<突く>	tsu?	tsukan	*tsuta
	tfi?	tfikan	tfita
/natuk-/<懐く>	natsu?	natsukan	natsuta

	natʃiʔ	natʃikan	natʃita
/tikaduk-/<近づく>	tʃikadzuʔ	tʃikadzukan	tʃikadzuta
	tʃikadziʔ	tʃikadzikan	tʃikadzita
/tumaduk-/<躓く>	tsumadzuʔ	tsumadzukan	tsumadzuta
	tsumadziʔ	tsumadzikan	tsumadzita
/suk-/<梳く>	suʔ	sukan	*suta
	ʃiʔ	ʃikan	ʃita
/yottuk-/<追いつく>	jottsuʔ	jottsukan	jottsuta
	jottʃiʔ	jottʃikan	jottʃita
/kiduk-/<気づく>	kidzuʔ	kidzukan	kidzuta
	kidziʔ	kidzikan	kidzita
/kidutuk-/<傷つく>	kidzutsuʔ	kidzutsukan	kidzutsuta
	kidzutʃiʔ	kidzutʃikan	kidzutʃita
/gudutuk-/<愚図付く>	gudzutsuʔ	gudzutsukan	gudzutsuta
	gudzutʃiʔ	gudzutʃikan	gudzutʃita
/kuttuk-/<くつつく>	kuttsuʔ	kuttsukan	kuttsuta
	kuttʃiʔ	kuttʃikan	kuttʃita
/tuttuk-/<つつく>	tsuttsuʔ	tsuttsukan	tsuttsuta
	tsuttʃiʔ	tsuttʃikan	tsuttʃita
c. /tug-/<注ぐ>	tsun	tsugan	tsuda
			*tsunda ⁴⁾
	tʃin	tʃigan	tʃida
			*tʃinda
/tug-/<継ぐ>	tsun	tsugan	tsuda
			*tsunda
	tʃin	tʃigan	tʃida
			*tʃinda

(4)に挙げた動詞では、V₁の位置にある母音/u/が[u]でも[i]でも現れている。これらの動詞に共通する特徴は、以下の通りにまとめられる。

- (5) a. 語幹末子音 C₁が、/s/, /k/, /g/のいずれかである。
 b. C₂は、/t/, /d/のいずれかである。

(5)の二つの条件が両方満たされたときに限り、V₁の位置にある母音が[i]としても現れることが出来るのである。

では次に、(5)の条件を満たしてなくても、V₁が[i]としても現れる場合があるかどうか、以下に例を挙げる。

- (6) a. /nuk-/<抜く> nuʔ nukan ?nuta

			nuita
	ji 2 ¹	pikan	+pita
b. /susug-/<濯く>	susun	susugan	susuda
			susunda
	+sufin	+sufigan	sufida
			*sufinda
/yusug-/<濯く>	jusun	jusugan	jusuda
			jusunda
	?jufin	?jufigan	+jufida
			*jufinda

(6)の例が(4)と異なる点は、C₂である。つまり、C₂=/n,s/のときにも「u → i 交替」が起こっていることになる。しかし、(6b)のV₁=[i]の例では、完了形を除くと完全に適格とは判断されていない。勿論(6a)ではV₁=[i]の例が完了形以外でも適格であることから、(5b)の条件を改訂するという方法も考えられるが、次のような例があることに注目してみたい。

(7) /minuk-/<見抜く>	minu 2 ¹	minukan	minuta
	*miji 2 ¹	*mipikan	*mijita

(7)は(6a)と同じ環境であるはずなのに、V₁=[i]の例は不適格になっている。ゆれがあるとしか言いようがないのかも知れないが、(5b)に/n,s/を含めて、

(8) C₂は歯音 (dental) である⁵⁾

と改訂して良いものかどうか、議論の余地のある所であろう。

しかし、ここでもう一つ気になることがある。次の例を見てみよう。

(9) a. /muk-/<剥く>	mu 2	mukan	muta
			muita
	mi 2	mikan	+mita
			mi:ta
/muk-/<向く>	mu 2	mukan	*muta
			muita
	mi 2	mikan	mita
/surimuk-/<擦りむく>	surimu 2 ¹	surimukan	surimuta
			surimuita
	surimi 2 ¹	surimikan	surimita
b. /huk-/<吹く>	φu 2	φukan	?φuta
			φuita
			φurta
	çi 2	çikan	+çita

2. i → u 交替

本節では、 $V_1 = /i/$ が[u]として現れる例を挙げる。次の例を見てみる。

(14) /hinnik-/<脱く>	çipni [?]	çippikan	çippita
	çinnu [?]	çinnukan	çinnuta
/hadik-/<弾く>	hadzi [?]	hadzikan	hadzita
	hadzu [?]	hadzukan	*hadzuta
/sik-/<敷く>	ji [?]	şikan	şita
	su [?]	sukan	*suta

これらを見ても分かるように、やはり C_2 は歯音である。即ち、(11)の条件を満たしていることになる。しかし、例外があることも否めない。

(15) /titik-/<咳く>	tfitji [?]	tfitşikan	tfitşita
	*tfitsu [?]	*tfitsukan	*tfitsuta
/kudik-/<挫く>	kudzi [?]	kudzikan	kudzita
	*kudzu [?]	*kudzukan	?kudzuta

これらは C_2 が歯音であるにもかかわらず、 $V_1 = [u]$ の形は不適格となっている。

本節では、まず(15)の例外を保留した上で議論を進めて行くことにする。本稿の最初でも述べたように、ここでの基底形の立て方は共通語的な発想に基づいている。/kudus-/<崩す>にしる/hadik-/<弾く>にしる、共通語からの類推によって、 V_1 を/u/や/i/にしているのである。これは、確かに調査の手段としては便利であるが、言語の記述上は間違っている。あくまで、当該の語形が適格かどうかという分布を観察しなければならない。そこで、「u → i 交替」としてきた(4)と「i → u 交替」であるとしてきた(14)とを比べてみる。再度、それぞれ一つずつ例を挙げる。

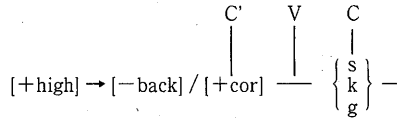
(16) a. /unaduk-/<頷く>	unadzu [?]	unadzukan	unadzuta
	unadzi [?]	unadzikan	unadzita
b. /hadik-/<弾く>	hadzi [?]	hadzikan	hadzita
	hadzu [?]	hadzukan	*hadzuta

これら二つの例は、語幹末子音 C_1 及び C_2 が同じペアである。異なるのは基底における V_1 だけであるが、これは前述したように、便宜上設定したものである。そこで、実際の分布を見てみると、ほぼ同じであることが分かる。⁶⁾ 両方とも、活用形の種類に関係なく、 C_1 が[i]で現れる形も[u]で現れる形も適格なのである。従って、 V_1 は基底では/i/でも/u/でも良い訳である。(16)の例であるならば、<頷く>が/unadik-/であっても、<弾く>が/haduk-/であっても、どちらでも良いのである。

そこで、本稿では後者の立場を取って行くことにする。即ち、(14)において、 V_1 は基底では/i/ではなく/u/であると仮定するのである。そうすると、(4)も(14)も全て基底では $V_1 = /u/$ となり、統一して扱える。つまり、「i → u 交替」が必要なくなり、全て「u → i 交

替」として扱えるのである。なぜ u → i 交替とするかについては有元 (1992c) でも議論したが、それは他の母音交替、つまり o → e 交替と並行性を持たせるためである。即ち、u → i 交替とすることによって、o → e 交替ともども「後舌母音から前舌母音への交替」として一括できるのである。そこで、u → i 交替規則は次のように定式化される。

(17) u → i 交替規則 (相対規則)⁷⁾



(18) C'トリガーハイアラキー

C' (=C₂) = t, d > s > n, m > h

(17)には、前述した(11)のハイアラキーが適用条件としてあることになるが、(14)を「u → i 交替」として考慮に入れても、(11)は改訂する必要がないので、そのまま(18)に挙げてある。(17)ではC₂の位置にあるC'を単純に[+cor]としているが、このC'がハイアラキー(18)のより左にある分節音であればあるほど、(17)が適用されやすい。このように、ある規則が適用される環境、つまりトリガー (trigger) の相対的な違いによって、適用の仕方が変わってくるような規則をここでは便宜上「相対規則 (relative rule)」と呼ぶことにする。

では、参考までに、従来の意味での「i → u 交替」が起こっていない例を挙げておく。

(19) /kik-/<開く>	kiʔ	kikan	*kita kita
	*kuʔ	*kukan	*kuta
/hik-/<弾く>	çiʔ	çikan	*çita çita
	*φuʔ	*φukan	*φuta
/kik-/<利く>	kiʔ	kikan	*kita kita
	*kuʔ	*kukan	*kuta
/hik-/<挽く>	çiʔ	çikan	*çita çita
	*φuʔ	*φukan	*φuta
/nagabik-/<長引く>	nagabiʔ	nagabikan	nagabita nagabita
	*nagabuʔ	*nagabukan	*nagabuta
/sappik-/<差っ引く>	sappiʔ	sappikan	sappita
	*sappuʔ	*sappukan	*sapputa
/nabik-/<靡く>	nabiʔ	nabikan	nabita

	*nabu ²	*nabukan	*nabuta
/hibik-/〈響く〉	çibi ²	çibikan	çibita
	*çibu ²	*çibukan	*çibuta
/waribik-/〈割り引く〉	waribi ²	waribikan	waribita
	*waribu ²	*waribukan	*waributa

3. u → i 交替と逆行同化と境界

u → i 交替は、そのターゲット (target) が V₁ であるが、V₁ だけでなく、V₂ までもが交替を起こす例がある。次の例に注目しよう。

(20) a. /tuduk-/〈続く〉	tsudzu ²	tsudzukan	tsudzuta
	tsudzi ²	tsudzikan	tsudzita
	*tfidzu ²	*tfidzukan	*tfidzuta
	tfidzi ²	tfidzikan	tfidzita
/tutuk-/〈つつく〉	tsutsu ²	tsutsukan	tsutsuta
	tsutfi ²	tsutfikan	tsutfita
	?tfitsu ²	*tfitsukan	*tfitsuta
	tfitfi ²	tfitfikan	tfitfita
/tuttuk-/〈つつつく〉	tsuttsu ²	tsuttsukan	tsuttsuta
	tsutfi ²	tsutfikan	tsutfita
	*tfittsu ²	*tfittsukan	?tfittsuta
	tfittfi ²	tfittfikan	tfittfita
b. /susug-/〈濯ぐ〉	susun	susugan	susuda
			susunda
	+sufin	+sufigan	sufida
			*sufinda
	*fisun	*fisugan	*fisuda
			*fisunda
	fifin	fifigan	fifida
			*fifinda
(21) a. /uduk-/〈疼く〉	udzu ²	udzukan	udzuta
	udzi ²	udzikan	udzita
	*idzu ²	*idzukan	*idzuta
	*idzi ²	*idzikan	*idzita
b. /yusug-/〈濯ぐ〉	jusun	jusugan	jusuda
			jusunda

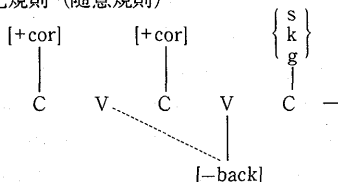
? ju ^h fin	? ju ^h figan	+ ju ^h fida
		* ju ^h finda
* isun	* isugan	* isuda
		* isunda
* i ^h fin	* i ^h figan	* i ^h fida
		* i ^h finda

これらの例は、便宜上次のような配列でここに挙げている。

- (22) a. $V_1=V_2=[u]$ で現れる形
 b. $V_1=[i], V_2=[u]$ で現れる形
 c. $V_1=[u], V_2=[i]$ で現れる形
 d. $V_1=V_2=[i]$ で現れる形

問題は、これら4つのパターンの内、どのパターンの形が適格になるかということである。まず(20)を見てみると、この例では(22c)の形だけが不適格に(不適格に近い形)になっている。一方、(21)では(22c,d)両方の形が不適格になっている。それでは、(20)と(21)はどこが異なるのだろうか。C₂は(20)、(21)とも歯音である。異なるのは、C₃である。(20)では、C₃は歯音であるのに、(21)のC₃はそうではない。つまり、C₃が歯音かどうかによって、V₂が交替するかどうかが決まってくるのである。従って、次のような定式化が出来よう。

(23) 逆行同化規則 (随意規則)



動詞の語幹末子音 C₁が/s, k, g/のいずれかであって、しかも C₂, C₃が[+cor]、即ち歯音であるとき、V₁の[-back]の指定はV₂にも波及する (spreading)。この規則によって、(20)の現象が記述できることになる。しかし、次のような一見例外的なものもある。

- (24) a. /kidutuk-/ <傷つく> kidzutsu² kidzutsukan kidzutsuta
 kidzut^hfi² kidzut^hfikan kidzut^hfita
 *kidzitsu² *kidzitsukan *kidzitsuta
 *kidzit^hfi² *kidzit^hfikan *kidzit^hfita
- b. /gudutuk-/ <ぐずつく> gudzutsu² gudzutsukan gudzutsuta
 gudzut^hfi² gudzut^hfikan gudzut^hfita
 *gudzitsu² *gudzitsukan *gudzitsuta
 gudzit^hfi² gudzit^hfikan gudzit^hfita

これらは両方とも(17)の適用後(23)の適用環境を満たすことになるが、(24a)では(22d)のパターンが不適格になるという点で分布上違いがある。この違いは、次の例が示すように、

境界 (boundary) の違いに還元できる。

- (25) a. kidzuntsu? <傷が(の)つく>
 b. *gudzuntsu? <ぐずがつく>

(25a)では格助詞<が(の)>に当たる[n]が入ることが出来るが、(25b)ではそれが出来ない。即ち、<傷つく>の語幹は/kidu#tuk-/のようにかなり大きな境界が入っており、<ぐずつく>にはそれよりも弱い境界があるか、それとも境界がない、即ち一単語であるということになる(語幹は/gudutuk-/のようになる)。このように考えると、境界の違いによって(23)の適用の仕方に制限を与えれば良いことになる。そこで、次のような条件を(23)に附属させることにする。

- (26) 逆行同化規則は単語境界(#)によって阻止される

こうすることによって、/kidu#tuk-/<傷つく>の場合、(22b)のパターンは適格となるが、(22d)のパターンは不適格になる。一方、/gudutuk-/<ぐずつく>の場合は、(26)の制約を受けないために(22d)のパターンも適格になる。

さて最後に、(23),(26)の例外を挙げておこう。二つしかないが、ひょっとすると重要な例かも知れない。

- (27) a. /hinnuk-/<脱ぐ>
- | | | |
|---------|-----------|----------|
| çipni? | çippikan | çippita |
| çinnu? | çinnukan | çinnuta |
| *çupni? | *çuppikan | *çuppita |
| *çunnu? | *çunnukan | *çunnuta |
- b. /tutuk-/<咳く>⁸⁾
- | | | |
|----------|------------|-----------|
| tfitfi? | tfitfikAN | tfitfita |
| *tfitsu? | *tfitsukan | *tfitsuta |
| *tsütfi? | *tsutfikan | *tsutfita |
| +tsutsu? | tsutsukan | tsutsuta |

(27a)の場合は、語幹の基底形が/hin#nuk-/であるために、(22d)のパターンが不適格になっているのかも知れない(前節でV₁を/i/ではなく/u/とした)。また、(27b)の場合は、規則(23)が義務的 (obligatory) に適用されたのかも知れない。今後の検討を要する。

4. V₁=[e]で現れる形

では次に、本論と関連するもう一つの重要な現象を取り上げておく。以下の例を見てもらいたい。

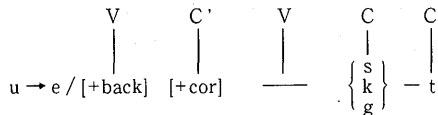
- (28) a. /yurus-/<許す>
- | | | |
|---------|----------|---------|
| juruçi | jurusan | juruta |
| *juriçi | *jurisan | *jurita |
| *jureçi | *juresan | jureta |
- /tukaihurst-/<使い古す>
- | | | |
|---------------|----------------|---------------|
| tsukaiçuruçi | tsukaiçurusAN | tsukaiçuruta |
| *tsukaiçuriçi | *tsukaiçurisan | *tsukaiçurita |
| *tsukaiçureçi | *tsukaiçuresAN | tsukaiçureta |

/kihurus-/〈着古す〉	kiϕuruçi	kiϕurusAN	kiϕuruta
	*kiϕuriçi	*kiϕurisan	*kiϕurita
	*kiϕureçi	*kiϕuresAN	kiϕureta
/saruk-/〈動き回る〉	saruʔ	sarukan	+saruta
	*sariʔ	*sarikan	*sarita
	*sareʔ	*sarekan	sareta
b. /kakus-/〈隠す〉	kakuçi	kakusan	kakuta
	*kakiçi	*kakisan	*kakita
	*kakeçi	*kakesAN	kaketa
/tukus-/〈尽くす〉	tsukuçi	tsukusan	tsukuta
	*tsukiçi	*tsukisan	*tsukita
	*tsukeçi	*tsukesAN	tsuketa
c. /mus-/〈蒸す〉 ⁹⁾	muçi	musAN	*muta
			mufita
	*miçi	*misan	*mita
	*meçi	*mesAN	meta
	moçi	mosAN	mota
d. /tubus-/〈潰す〉	tsubuçi	tsubusan	tsubuta
	*tsubiçi	*tsubisan	*tsubita
	*tsubeçi	*tsubesAN	tsubeta

これらは、C₂の種類によって分類されている。(28a)ではC₂=/r/、(28b)ではC₂=/k/、(28c)ではC₂=/m/、(28d)ではC₂=/b/であるが、いずれもV₁=[e]で現れる形が完了形でのみ適格である。勿論、V₁=[e]で現れる例は(28)のみであって、前節までに挙げた例には出てこない。では、何がトリガーになっているのだろうか。まず、C₂に注目してみると、(28a)のように、/r/である場合には必ずV₁=[e]で現れる完了形が適格である。C₂=/r/以外の場合には例外がある。次に、(28)の殆どの例がV₁=V₂=/u/である点にも注意したい。勿論、/saruk-/〈動き回る〉や/kakus-/〈隠す〉のようなV₂=/a/の場合もあるが、それならば(V₁)V₂=[+back]であるとすれば、全ての例をカバーすることができる。

また、この現象を「u→e 交替」として捉えていいかどうかの問題も残るが、ここでは暫定的にu→e 交替規則として次のような定式化しておく。

(29) u→e 交替規則 (相対規則)



そして、ここでもC₂によってV₁=[e]で現れる完了形の適格性が決まってくるので、そ

れを(18)と同様ハイアラキーで表しておくことにする。

$$(30) C' (=C_2) = r > k > m, b$$

このハイアラキーの左の方が、より $V_1 = [e]$ の形が出てきやすい (29) が適用されやすい) ということになる。

5. o → e 交替との関連性

以上、 $u \rightarrow i$ 交替及び $u \rightarrow e$ 交替について述べてきた。そして、どちらの現象とも C_2 のハイアラキーによって交替規則の適用のされやすさが変わってくると仮定した。本節では、この仮説にどれだけの妥当性があるかについて、 $o \rightarrow e$ 交替と対照しつつ考察して行くことにする。 $o \rightarrow e$ 交替については有元 (1992a) で扱ったが、そこでは「トリガーのハイアラキーによる音韻規則の制約」という考え方はしていない。そこで、この仮説のもとで、 $o \rightarrow e$ 交替を再度定式化することから始める。

まず、 $o \rightarrow e$ 交替現象の例を簡単に挙げておく。

(31) a. /koros-/ <殺す>	koroçi	korosAN	korota
	*koreçi	*koresAN	koreta
b. /hotok-/ <解く>	hoto?	hotokAN	hotota
	hote?	hotekAN	hoteta
c. /igok-/ <動く>	igo?	igokAN	igota
	*ige?	*igekAN	*igeta

(31a) は完了形でのみ $V_1 = [e]$ で現れる形が適格である例、(31b) は活用形の種類に関係なく $V_1 = [e]$ の形が適格である例、そして (31c) は全ての活用形で $V_1 = [e]$ の形が不適格な例である。それぞれのパターンで一つずつの例しか挙げていないが、この $o \rightarrow e$ 交替も C_2 が何であるかに関わっている (詳細は有元 (1992a) を参照のこと)。そこで、本稿と同様に C_2 のハイアラキーを設定してみると、おおかた次のようになる。¹⁰⁾

$$(32) C_2 (=C') = t, d > r, k > z, g, b, m$$

$o \rightarrow e$ 交替規則は次のようになる。

(33) $o \rightarrow e$ 交替規則 (相対規則)

$$\left[\begin{array}{c} -\text{high} \\ -\text{low} \end{array} \right] \rightarrow [-\text{back}] / [+cor] \quad \begin{array}{c} C' \\ | \\ \text{---} \end{array} \quad \begin{array}{c} V \\ | \\ \text{---} \end{array} \quad \begin{array}{c} C \\ | \\ \left\{ \begin{array}{c} s \\ k \\ g \end{array} \right\} \end{array} \text{---}$$

さて、ここで注目したことは、母音交替規則そのものがどう定式化されるのかといったことではなく、音韻規則に制約を及ぼすトリガーのハイアラキーの問題である。そこで、以上三つのトリガーハイアラキーを再度並記してみよう。

$$(34) a. u \rightarrow i \text{ 交替} : C_2 = t, d > s > n, m > h$$

$$b. u \rightarrow e \text{ 交替} : C_2 = r > k > m, b$$

c. o → e 交替: $C_2 = t, d > r, k > z, g, b, m$

ここで気がつくことは、どのハイアラキーも似ているということである。具体的に言えば、ハイアラキーの左の方には [+cor] である分節音が集まっており、右の方には [+grave] (低音調性)¹¹⁾ の分節音が来ている。従って、これらのハイアラキーをより一般的にすると、次のようになるのではなからうか。¹²⁾

(35) $C_2 = \text{Coronality} > \text{Gravity}$

(35)が言おうとしていることは、 C_2 の Gravity が高いよりも Coronality が高い方が、素性 [back] に関わる母音交替は起こりやすいということである。勿論、これは V_1 の [back] の指定を変えるような交替のときだけに言えるだけのことも知れない。しかし、それを念頭に置いた上で(35)を振り返ってみると、なぜ C_2 の Coronality の高い方が母音交替が起こりやすいのだろうか。一般的に言って、[+cor] である分節音の方が [+grave] である分節音よりも無標 (unmarked) であることは確かである。そうすると、(35)は次のようにより一般的な原則に置き換えられるのであろうか。¹³⁾

(36) $C_2 = \text{Unmarked} > \text{Marked}$

即ち、本稿で取り上げた [back] の交替現象に関しては、 C_2 がより無標である場合に V_1 の交替がより起こりやすいと言えるのではなからうか。

6. おわりに

以上の議論から、本稿及び有元 (1992a) で扱った素性 [back] に関わる母音交替現象には、(i) C_1 (語幹末子音) 及び C_2 がトリガーである。(ii) トリガー C_2 の Gravity よりも Coronality の高い方が、より交替が起こりやすい、ということが分かった。これら母音交替規則の定式化自体が妥当なものなのか、またトリガーハイアラキーがより一般的な原則として捉え直すことができるのか、問題はまだまだ発展しそうである。

また、本稿では、前稿までのように不完全指定 (underspecification) の概念は用いなかった。どちらがより妥当な方法であるのか、他の母音交替との関連性も考えなければならぬが、有元 (1992c) の改訂版に期することにする。

【注】

- 1) 本稿では、例を以下のようなフォーマットで挙げて行く。まず、一番左に基底形を挙げ、 $\langle \rangle$ にはその大体の意味を記す。次に、活用形を未完了肯定連体形（以下「終止形」）・未完了否定連体形（以下「否定形」）・完了肯定連体形（以下「完了形」）の順に挙げるが、それぞれの意味は省略する。勿論、活用形の名称は便宜上のものである。音声形の左側に付けた各種の記号には、次のような意味がある。まず、記号*はその音声形が不適格であることを、記号?はその音声形が少々奇妙であるとインフォーマントが感じている形であるということをそれぞれ表す。また、記号+は適格性の判断は揺れているが、どちらかと言うと適格に近い形であるとインフォーマントがコメントしたことを表す。音声表記は簡略表記を採っている。基底形を記号//で、音声形を記号[]で括って示すが、文脈上明らかな箇所では省略する。境界記号-は形態素境界 (morpheme boundary) を、記号#は単語境界 (word boundary) をそれぞれ表す。Cは子音、Vは母音を表す。
- 2) 次のような音節数条件によって、不適格になっている。
- (i) 語幹末子音が/s/, /k/で、その直前の母音が/u/である動詞において、その語幹が一音節である場合、短母音形は不適格となる。
- ここで言う「短母音形」とは、語幹末子音の直前の母音が短母音として現れる形のことである。
- 3) C, Vの subscript は、他の拙稿と同様、分節音の位置を表す便宜上のインデックスに過ぎない。それは、語幹末から単語初頭に向かって、C, Vそれぞれ順に_{1,2,3}…とふってある。従って、語幹末子音はC₁、その直前の母音はV₁、その直前の子音（があれば、それ）はC₂…という具合である。また、以下の例では、特に断らない限り、V₁= [e]として現れる形は全ての活用形で不適格である。
- 4) 次のような音節数条件によって、不適格になっている。
- (i) 語幹末子音が/g/である動詞では、その語幹が一音節である場合、語幹末子音の直前の母音に関係なく、鼻子音形は不適格となる。
- 「鼻子音形」とは、完了形で語幹末子音が鼻子音[n]として現れる形のことである。
- 5) 但し、/r/は含まれない。
- 6) * [hadzuta] <弾いた>がなぜ不適格になるのか理由は分からない。[hadzuta] <外した>と同音異義語になるからかも知れないが、根拠はない。
- 7) [cor] = coronal (舌頂性) を表す。(17)を始めとする本稿で提出する規則は全て、動詞にのみ適用されるものであることに注意されたい。従って、次の例のように、(17)は名詞には全く適用されないし ((i)参照)、動詞であってもC₁が適用環境に合致しない (活用の種類が違う) 場合も勿論適用されない ((ii)参照。完了形しか挙げていない)。
- (i) tsutsun *tsutfin *tfitsun *tfitfin <包み>

tsudzun	*tsudzɪn	*tʃidzʊn	*tʃidʒɪn	<鼓>
tʃidzu	*tʃidʒi	*tsudzu	*tsudʒi	<地図>
tsudzu 2	*tsudʒi 2	*tʃidzu 2	*tʃidʒi 2	<続き>
(ii) /tʉduke-/ <続ける>		tsudzuketa		
		*tsudzɪketa		
		*tʃidzɪketa		
		*tʃidʒɪketa	<続けた>	

- 8) ここでは、語幹の基底形を /tʉtuk-/ としているが、[tsʉtsʉ 2] <咳く> の適格性に揺れがあること、またインフォーマントの反応から [tʃitʃi 2] の方を良く使うことから、この基底形には疑問が残る。
- 9) この語幹基底形は /mos-/ であるという可能性もあるが、それについては注10) を見てもらいたい。
- 10) ハイアラーキー(32)には /m/ も入っているが、これは(28c)の語幹を /mos-/ <蒸す> として、o → e 交替が起こっているとしたからである(有元(1992a)では、この例を考慮していない)。<蒸す>の語幹を /mus-/ とするか /mos-/ とするかについては議論の余地がある。[meta] <蒸した> のような V₁ = [e] で現れる形を、u → e 交替として捉えるか、o → e 交替として捉えるかも問題である。また、V₁ = [u] の形と V₁ = [o] の形との関連性についても問題がある。一つ考えられることは、V₁ の [high] を基底で無指定にしておくことである。つまり、V₁ = [Ohigh, -low, +back] としておくのである。しかし、こうすると V₁ = [e] の形を派生する規則を変えなければならない。<蒸す> のような振る舞いをする項目が他にあるかどうかとも問題であるが、全て今後に期する。
- 11) 音響学的に低音調性はスペクトルのより低い周波数の部分にエネルギーの集中があるものと定義されている。低音調性に含まれる音は、後舌母音・唇音・軟口蓋音などである(Jakobson & Halle (1956) 参照)。
- 12) 当方言の音韻体系では Coronality と Gravity は表裏の関係にあるので、
 (i) C₂ = [+cor] > [-cor]
 などと一つの素性に統一して記述した方が良いのかも知れないが、これはテクニカルなことであって、言いたいことは同じである。気になることは、(34a) (=18) のハイアラーキーには /r/ が含まれないことである。この点だけは、いくら(35) のような一般化をしようとも言うておかなければならない。このような /r/ の特殊性については、Mester & Itô (1989) 等で述べられているが、本稿では省略する。
- 13) [+cor] である分節音の無標性が高いということは、様々な分野から証拠が提出されている(Paradis & Prunet (1991) 等参照のこと)。

【参照文献】

- 有元光彦 (1991) 「五島列島・下崎山町方言における動詞語幹内母音の交替— a/o 交替・o/e 交替—」『九大言語学研究室報告』第12号 九州大学文学部言語学研究室編 pp.79-91
- (1992a) 「五島列島・下崎山町方言の動詞語幹における o/e 交替」『九大言語学研究室報告』第13号 九州大学文学部言語学研究室編 pp.45-57
- (1992b) 「五島列島・下崎山町方言の動詞における後舌母音の交替」『文学研究』第89輯 九州大学文学部編 左 pp.1-32
- (1992c) 「母音交替?! —五島列島・下崎山町—」『岡山大学 言語学論叢』第2号 岡山大学言語学研究会編 pp.91-112
- Jakobson, R. & M. Halle (1956) *Fundamentals of Language*. The Hague: Mouton
- Mester, R. A. & J. Itô (1989) "Feature Predictability and Underspecification: Palatal Prosody in Japanese Mimetics," *Language*, Vol.65, No.2, pp.258-293
- Paradis, C. & J.-F. Prunet (1991) *Phonetics and Phonology*, Vol.2, The Special Status of Coronals: Internal and External Evidence, Academic Pr.

u/i-Alternation of Verb Stem in the *Shimo-sakiyama-chô* Dialect in the *Gotô* Islands

Mitsuhiko Arimoto
Baiko Jo Gakuin Junior College

In the *Shimo-sakiyama-chô* dialect, there are various vowel alternations in the stem of verbs, where the vowel directly before the stem-final consonant alternates due to some consonantal trigger. In this paper, I shall treat $\langle u \rightarrow i \rangle$ alternation. This phenomenon is that /u/ in the underlying form appears as [i] in the surface form at the position directly before the stem-final consonant. The following is the trigger of the phenomenon:

- (i) The stem-final consonant is /s/, /k/, or /g/.
- (ii) The first consonant which precedes the stem-final consonant is coronal.

As for the coronality in (ii), "Trigger Hierarchy" exists:

- (iii) Trigger Hierarchy: Coronality > Gravity

The higher the degree of coronality in the trigger (ii) becomes, the more appropriate and frequent $\langle u \rightarrow i \rangle$ alternation becomes, that is, $\langle u \rightarrow i \rangle$ alternation rule is likely to be applied.

The phenomenon of $\langle o \rightarrow e \rangle$ alternation occurs when the condition is identical to (iii). Therefore, the vowel-alternation on the feature [back], $\langle u \rightarrow i \rangle$ and $\langle o \rightarrow e \rangle$ alternation, can be treated in the same manner.